木賊

世阿弥作

ワキ　旅僧
シテ　草刈る翁
ツレ（二人）　同行者
子方　翁の子松若

地は　信濃
季は　秋

ワキ次第「信濃路遠き旅衣。〳〵。日も遥々の心かな。

詞「是は都の者にて候。又是に渡り候ふ御方は。本国は信濃の国の人にて御座候。いまだ父を御持ち候ふが。今一度御対面ありたきよし仰せられ候ふ間。我等御供申し。信濃の国へと急ぎ候。

道行「道あるや。旅の関の戸明け暮れて。〳〵。宿はいづくと定めなく。行方も知らぬ身ながらも。伴なふ人は有明の。月日ほどなく木曽路へて。園原山

に着きにけり。〳〵。

シテツレ一声「木賊刈る。山の名までも園原や。伏屋の里も秋ぞ来る。

ツレ「梢はいづれ一葉ちる。

三人「嵐や音を残すらん。

シテサシ「面白や処は鄙の住居なれども。実に名所の故やらん。山野の詠めも気色だつ。

三人「木曽の御坂の梢より。浮ぶ雲間の朝づく日。園原

山にうつろひて。木賊かる野の青緑。草の袂も猶ふかし。

下歌「男鹿鳴く野の行方まで。妻やこもりしそのはらの。

上歌「所は信濃路や。〳〵。木曽の梯かゝる身の。うき世を渡るならはしに。さも馴衣しほたれて。袖の露もいとなし。草莚。露を片敷く有明の。朝な〳〵出づるや。牧笛の野人ならまし。いざ〳〵木賊刈らうよ。〳〵。

ロンギ地「刈るや木賊の言の葉は。いづれの詠めなるらん。

シテ「木賊かる。園原山の木の間より。みがゝれ出づる秋の夜の。月影をもいざや刈らうよ。

地「影も仮なる草の原。露分衣しほたれて。刈れや〳〵花草。

シテ「木賊かる。〳〵。木曽の麻衣袖ぬれて。みがゝぬ露の玉ぞ散る。

地「散るや霰のたま〳〵も。心の乱れ知るならば。

シテ「胸なる月は曇らじ。

地「実に誠何よりも。研くべきは真如の玉ぞかし。思へば木賊のみか。われもまた木賊の。身をたゞ思へ我心。みがけやみがけ身の為めにも。木賊刈りて取らうよや。木賊刈りて取らうよ。

ワキ詞「如何に是なる尉殿に尋ね申すべき事の候。

シテ詞「此方の事にて候ふか何事にて候ふぞ。

ワキ「見申せば年たけ給ひたるが。手づから木賊を刈り持ち給ふ事。其身にも応ぜぬわざと見えて不審にこそ候へ。

シテ「其身にも応ぜぬわざと承れば。人がましうこそ候へ去りながら。園原山の木賊は。名所といひ名草といひ。歌人も御賞翫なれば。手づから刈りもち家づとゝ心ざし候。

ワキ「実に〳〵尤にて候。さて此所に伏屋の森と申す森の候ふか。

シテ「さん候あれに見えたるこそ伏屋の森にて候へ。

ワキ「あの伏屋の森に。筬木と申す木の候ふか。

シテ「御覧候へ梢に一木うす〳〵と見えたるこそ筬木にて候へ。筬草に似たる木にて候ふにより。筬木と申しならはして候。これは宿り木にて候。

ワキ「古言の思ひ出でられて候。園原や伏屋に生ふる箒木の。ありとは見えて逢はぬ君かなとよめり。何とてありとは見えて逢はぬ君かなとはよまれて候

ふぞ。

シテ「賤しき身にて候へば。其心を何とて知り候ふべきなれども。所に申し習はしたる義を以て。歌の心を推量申し候ふに。あの筬木を此辺より見れば見え候ふが。木陰によりては見え候はぬぞとよ。其心を歌人知りて。有りとは見えて逢はぬ君かなとよまれたる歌にて候ふやらん。

ワキ「さて今もよりては見え候はぬか。

シテ「中々の事唯今その証拠を見せ申さんと。

ワキ「たがひに近づき立ちよりて。

シテ「見ればありつる箒木の。

ワキ「陰にて見ればかきたえて。

シテ「何れかそれぞ。

ワキ「不思議やな。

地「よそにては。正しく見えし箒木の。〳〵。陰に来て見ればなかりけり。実にも正しく。ありとは見えて逢はぬ君かなと。よみおく言のはゝきゞは面白や。げにや道ある心とて。誠なりける歌人の。言葉の林しげるもや。其箒木の種ならん。〳〵。

シテ詞「いかに御僧たちに申し候。我らが私宅は旦過にて候。一夜を明して御通り候へ。

ワキ「あら嬉しやさらば参らうずるにて候。

ツレ「如何に御僧達御心安く御座候へ。今の尉殿は少し身に思ひの候ひて。時々は現なき風情の候。其時

は心得有つて御あひしらひ候へ。

ワキ「心得申して候。

シテ「いかに御僧たち。今夜は心静かに尉が身の上を語つて聞かせ申し候ふべし。此尉は子を一人持ちて候ふを。行方も知らぬ人にさそはれ暮に失ひて候。若も行方や聞くと思ひ。此路次に居所を立て。行来の人を留め申し候。我子の常は小歌曲舞にすきて。友を集め舞ひ謡ひ候ひし程に。此尉も時々は

舞ひうたひ候。誰かある御盃を参らせ候へ。

子「いかに申し候。唯今の尉殿は我らが親にて候。

ワキ「何唯今の尉殿は。御親父にて御座候ふとや。さらばやがて御名のりあらうずるにて候。

子「いや暫く。思ふ子細の候へば。先しらぬよしにて御入り候へ。

ワキ「心得申し候。

シテ「いかに御僧たちに申し候ふ。余りに夜長に候ふ程

に。酒を持ちて参りて候。

ワキ「御志はありがたけれども。飲酒は仏の戒めにて候。

シテ「飲酒は仏の御戒めは去る事なれども。彼廬山の恵遠禅師。虎渓を去らぬ禁足にだに。陶淵明が志にて飲酒を破りしぞかし。ましてや我子のもて遊びし。舞曲の酒宴の戯ぶれにて。老生を慰む志をば。などかあはれみ給はざらん。

地「廬山の古へを思し召さば。心の底までも汲みて知

る。法の真水と思しめして。飲酒の心とけて。一つきこしめされよ。

地クリ「夫れ誤つて仙家に入つて。半日の客たりといへども。旧里に帰つて。七世の孫に逢ふ事をともいへり。

シテサシ「況んや一世の親子として。など其情なからざらん。

地「ていたいは薪を採り。老いたる母をはごくみ。虞舜は頑なる父をうやまふとも言へり。

シテ「たとひ老後の愚なりとも。

地「孝恩の心なからんやと。恨みの涙連々たり。

クセ「然るに教主釈尊も。羅睺為長子と説き給へり。いはんや二仏の。中間の衆生として。恩愛のあはれを知らざらんは。木石に異ならず。石の火の光りの間をだにも。などや添ひもせぬ。親は千里を行けども。子を忘れぬぞ誠なる。子はあつて千年を経れども。親を思はぬならひとは。今身の上に知

られたり。

シテ「げにや人の親の。

地「心は闇にあらねども。子を思ふ道に迷ふとは。誠なりや我ながら。其面影の忘られぬ。昔に返す舞の袖。我子はかうこそ舞ひし物を。此手をばかうこそさしゝぞとて。左右に颯々の袖を垂れ。一つは又酔狂も。まじると人や御覧ずらん。酔泣きも子を思ふ。涙とや人の見るべき。子を思ふ。（序の舞）

シテワカ「子を思ふ。身は老鶴の鳴く物を。

地「げにや子を思ふ。闇の夜鶴の声は盃中。

シテ「廻るも盃。

地「五老の月の。影に酔ひふす枕の上に。

シテ「来らば我子よ。

地「親ものに狂はゞ。子は囃すべき物を。

シテ「あら恨めしや唯。

地「うらめしやたゞ。舞も歌もうつゝなさも。子故な

ればの波の。あはれ立ち帰り。今一目父に見え

よかし。

ロンギ地「この上は。何かつゝまん是こそは。別れし御子松

若と。言ふにもすゝむ涙かな。

シテ「誰そや我子と夕月夜。おぼつかなしや何れさて。

別れし我子なるらん。

地「かはる姿の衰へは。げにそれならぬ有様を。

シテ「よく〳〵見ればさすがげに。

地「親なりけり。

シテ「子なりけるぞや。

地「恨めしやなどされば。とくにも名のり給はぬぞと。逢ふ時だにも恨みある。こは夢か夢にても。逢ふこそうれしかりけれ。

地「かくて親子に合竹の。〳〵。世を故郷をあらためて。仏法流布の寺と為し。仏種の縁となりにけり。あとに伏屋の物語。うき世がたりになりにけり。

〳〵。

底本：国立国会図書館デジタルコレクション『謡曲評釈 第二輯』大和田建樹 著